

チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院における音楽教育の伝統
-ピアノ演奏芸術-

Tradition of music education at Moscow Conservatory
-Piano performance art-

西尾真実

Mami Nishio

はじめに

2008年1月第4回スクリャービン国際コンクールに参加する為、初めてロシアという地に足を踏み入れた。コンクールは全てチャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院で行われ、会場であるマーリーザール¹の前に掲げられている歴代成績優秀卒業者の名が刻印されている大理石板では、モスクワ音楽院の歴史を目の当たりにする。

「セルゲイ・タネーエフ、アレクサンドル・ジロティ、セルゲイ・ラフマニノフ、アレクサンドル・スクリャービン、コンスタンチン・イグムーノフ、アレクサンドル・ゴリデンヴェイゼル、ニコライ・メトネル、グリゴリー・ギンズブルク、ヤコフ・フリエール、アラム・ハチャトゥリアン、ヴィクトル・メルジャーノフ、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ、スヴャトスラフ・リヒテル」ⁱⁱ

このような才能を次々と輩出するモスクワ音楽院の音楽教育の伝統、ロシアピアノイズムに興味関心を抱いた。モスクワ音楽院の歴史、どのような教育者がいて、現在に続くピアノ演奏芸術が発展してきたのか。

2009年9月から2015年1月にかけて実際にモスクワ音楽院へ留学した筆者の経験に基づき考察していきたい。

凡例

- ・ ロシア人名のカナ表記は、原則としてロシア語での発音を重視し、既に定着している日本語読みがある場合はそちらを採用した。基本的に姓のみを記し、父称は割愛して記載した。但し、姓名、名前のみ記した箇所もある。
- ・ 地名、人名、団体名（学校や機関）その他の固有名詞の正式名称については、二回目

以降の記載、また必要に応じて略称で記した。

- ・ ロシア史上、国名、地名の名称が時代により変化していくが、今回文中の流れに沿って記した。

例) アントン・ゴリゴリエヴィチ・ルビンシテイン→アントン・ルビンシテイン
チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院→モスクワ音楽院

1. ロシア・ピアノの起源

ルビンシテイン兄弟の出現と音楽院誕生

モスクワ音楽院本科では「演奏芸術の歴史」という授業がある。ピアノ専攻の学生で構成されたクラスでは、先ずモスクワ音楽院の歴史を学ぶことから始まる。

「ロシア音楽の作曲家の祖がミハイル・格林カなら、ロシア・ピアノの祖はアントン・ルビンシテインである」ⁱⁱⁱとあるように、アントン・ルビンシテインと弟のニコライ・ルビンシテインは十九世紀ロシア演奏芸術の発展において必要不可欠な存在である。

アントン・ルビンシテイン（1829～1894）は、南ロシアのポドリスク地方ヴィフヴァチネツ（現在モルドバ共和国ルブニツァ）のユダヤ家系に生まれる。音楽学校がなかった当時、5歳より母から手ほどきを受け音楽の基礎を身につける。7歳になるとより本格的に音楽を勉強するためアレクサンドル・ヴィルアン^{iv}に師事。1839年初めて公式演奏会を行い、師ヴィルアンはアントンの大きな才能を確信する。翌年欧州各地で演奏ツアーを行った際には、パリでの演奏を機にショパンやリストに出会う。この頃ロシアでは、格林カのオペラ「皇帝に捧げし命（イヴァン・スサーニン）」（1836）や「ルスランとリュドミラ」（1842）が誕生し、「国民楽派」と言われる時代に入っていく。

1859年アントンはロシアの専門的音楽教育の発展と向上、才能の育成などを目的とした音楽組織としてペテルブルクにロシア音楽協会（RMS）を創設。3年後の1862年には高い水準の職業音楽家を育成する為の音楽教育機関として、アントン主導のもとペテルブルク音楽院（1944年より現在の名称「リムスキー＝コルサコフ記念国立サンクトペテルブルク音楽院」）が創立された。第1期生にはアントンの弟子であるチャイコフスキーを筆頭に、後にリャードフ、ミャスコフスキー、プロコフィエフ、ショスタコーヴィッチなどの才能を輩出した。アントン自ら音楽院学長を1862～1867年と1887年～1891年にわたり務め、2度目の学長時代には特にピアノ教師の育成に力を注ぎ、生徒達が卒業と同時に職業ピアノ

ニストとして仕事ができるようにと、ピアノ科生徒に伴奏の勉強過程を修めさせた。これは現在に続くピアノ科必須科目「歌曲伴奏法」の礎となっている。また教育活動と併行してロシアはもとより欧州、アメリカで演奏活動を行い、13のオペラ、6つの交響曲、5つのピアノ協奏曲、多様な編成での室内楽曲、100曲以上になる歌曲等、数多くの作品を残した。

アントンの実弟であるニコライ・ルビンシテイン（1835～1881）もまた、4歳から母の手ほどきを受け、7歳には兄アントンと一緒に演奏会で演奏している。ベルリンでピアノをテオドール・クラク^vに音楽理論をジークフリート・デー^{vi}に学び、後にヴィルアンに師事する。1855年モスクワ大学法律科を卒業、またこの頃既に音楽家としてのニコライ・ルビンシテインの名が知られていた。

兄アントンからの助言もあり、1860年モスクワにロシア音楽協会設立。1866年9月1日にはモスクワ音楽院（1940年5月7日チャイコフスキー生誕100年を記念し、現在の「チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院」という名称になる）を創立し、ニコライはモスクワ音楽院学長とピアノ科教授として教鞭をとった。ニコライはモスクワを中心にサンクトペテルブルク、ロシア各地で演奏活動を行い、レパートリーは、バッハ、ベートーヴェン、リスト、シューマン、ショパン、ロシアの作曲家の初演作品、生涯親交のあったチャイコフスキーの作品（オペラ「エフゲニー・オネーギン」の初演等）を含む幅広く膨大なものであった。

モスクワ音楽院が創立された当時26歳のピョートル・チャイコフスキー（1840-1893）は、ニコライから招聘を受けモスクワ音楽院で12年間教鞭をとり、高弟にはセルゲイ・タネーエフがいた。チャイコフスキーは「ディレッタンティズムに陥らないようにしなければならない。人は生まれつき不精で、芸術家が怠惰に屈する事は最悪な事。しばしば気分を変え、やる気のない怠け癖に打ち勝つ、これが芸術家に課せられた義務。」^{vii}と述べている様に、作品は多岐にわたり交響曲、協奏曲、バレエ「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」、オペラ「エフゲニー・オネーギン」「スペードの女王」などの傑作を多数生み出した。

チャイコフスキーはニコライに交響曲第1番ト短調「冬の日の幻想」、ロシア風スケルツォ、ピアノ協奏曲第2番ト長調を献上している。しかし、この協奏曲完成直後の1881年にニコライが急死し、ニコライ本人での初演は叶わず、指揮アントン・ルビンシテイン、ピアノはタネーエフによって初演された。ニコライの死後、チャイコフスキーは「悲しみの三重奏曲 イ短調 -偉大な芸術家の思い出に-」を作曲。故人を偲び室内楽曲を作曲するというロシア音楽の伝統は、アレンスキーからラフマニノフを経て、ショスタコーヴィチ

やシュニトケに受け継がれた。

2. ピアノ演奏芸術の発展

モスクワ音楽院の名教授

二十世紀の幕開けと同時に、ピアノ演奏芸術が急速に発展する。この時代の四人の偉大な教育者、コンスタンチン・イグムノフ、アレクサンドル・ゴリデンヴェイゼル、レオニード・ニコラーエフ、ゲンリヒ・ネイガウスによってモスクワ音楽院のピアノ楽派(カフエドラ)^{viii}が形成された。文末掲載のピアニスト系譜図を見てわかるように、ルビンシテイン兄弟とリスト、パープスト、レシエティツキなどの外国人のメソッドを継承しながら派生している。この系譜図に記したものはほんの一部であり、例えばゴリデンヴェイゼル高弟のローザ・タマルキナがネイガウスクラスへと足を運んだことなど、楽派を超えて相互に音楽を追求していたのは周知の事実である。

ゴリデンヴェイゼル (1922～24、1939～42)、イグムノフ (1924～29)、ネイガウス (1935～37) はモスクワ音楽院学長を務め、生涯モスクワ音楽院で教鞭をとった。

ゴリデンヴェイゼルは才能豊かな子供達のために 1932 年モスクワ音楽院附属中央音楽学校の創設に関わり、第一回チャイコフスキー国際コンクール (1958) の審査員長を務めた。またロシア文豪レフ・トルストイ (1828～1910) とも親交があり、著書「トルストイとの思い出」^{ix}をはじめ、タネーエフやラフマニノフに関しての音楽文献を残した。

ネイガウスもまた多数文献を残しており、中でも「ピアノ演奏芸術」^x は現在に読み継がれている名著である。ネイガウスは「才能とは情熱プラス知性」と考え、単にピアノ演奏法を教授するだけではなく、芸術的イメージ、楽曲への理解、知的思考を発展させる事を大切にしていた。「頭に音楽を宿し、心でそれを持ち運び、自らの耳でそれを聞く」^{xi}ことを説いている。各々の教授は音楽への愛情と芸術に対する確固たる信念のもと、教育活動と第一線で活躍する演奏家として活動し続け、ソヴィエト音楽教育システムと伝統の確立に貢献した。

ネイガウスの愛弟子にスヴァトスラフ・リヒテル (1915-1997) がいる。1984 年モスクワ国立プーシキン美術館でのリヒテル主催音楽祭「十二月の夕べ」で、リヒテルはショスタコーヴィチ作曲ピアノ三重奏曲第 2 番についてこの様に語っている。

「... (前略)「型破り」と言われても、私はそう思って演奏していません。楽譜どおりに弾くだけです。... 一切自分を表に出さないよう心がけています。楽譜に書いてある以上のことは必要ないのです。ショスタコーヴィチですら何かを加えることは出来ません。台無

しになるだけです。でも心では楽譜以上のものを感じています。」^{xii}

二十世紀最大のピアニストリヒテルは、ネイガウスの精神「冷静な知性と熱い心」を確実に受け継いでいると言えよう。

ロシア革命、世界大戦、社会主義リアリズムとソ連崩壊の激動の時代と社会を駆け抜け、モスクワ音楽院は2016年150周年を迎えた。筆者がモスクワ音楽院へ入学した当時のピアノ科は、ヴィクトル・メルジャーノフ、セルゲイ・ドレンスキー、ミハイル・ヴォスクレセンスキー、ヴェーラ・ゴルノスタエヴァの四つの楽派であった。

しかし、メルジャーノフ（2012）、ゴルノスタエヴァ（2015）両教授が立て続けに此の世を去り、今やロシアピアニズム、ロシアの音楽教育は新たな時代を迎えている。モスクワ音楽院は、これまでの偉大な伝統を守り継承しながら、ピアノ演奏芸術は新しい境地へと今も発展を遂げている。

3. モスクワ音楽院留学

モスクワ音楽院ではアンドレイ・ピサレフ^{xiii}教授のもと五年半学んだ。ドレンスキー教授のアシスタントでもあるピサレフ教授のレッスンでは、ドレンスキー、ピサレフ門下が入り混じり週三回あるレッスンは全て公開形式である。初回レッスンから暗譜での演奏は勿論のこと、準備不足だと一曲すら弾かせてもらえず帰される事もあった。時には、一フレーズのレガートやピアノという楽器を用いて歌うことに何時間も費やした。ラフマニノフのピアノ協奏曲2番を勉強した時には、冒頭和音の鐘の音から第二テーマの歌心、幅広いダイナミックや楽器を鳴らすこと、ロシア特有の壮大なスケールの表現など、ロシアでの生活が作品理解と想像力に大きく繋がり助けとなった。また日々行われる音楽院でのコンサートでは師匠の演奏はもとより、世界一流音楽家の本物に触れ、2012年のチャイコフスキーコンクールでは同世代音楽家の演奏を数多く聴いた。教授との演奏解釈での討論や本番後の批評、日々の音楽家同士での探究において、より一層自分の演奏に責任を持つこととなる。

モスクワ音楽院本科留学生は専攻実技ピアノ以外に室内楽、歌曲伴奏法、教授法や音楽史を含める音楽専門16科目、ロシア語、哲学、美学、美術史、ロシア史などの一般7科目が必修。授業形態は基本的に教授の口述したものを書き取り、全ての科目において口頭試験であった為、語学力と自主性、判断力が自然と身についた。ロシア語授業では語学に必要な基礎知識の他、プーシキン、ゴーゴリー、チャーホフ、ドストエフスキー、トルストイの文学作品を読み、美術史はトレチャコフ美術館やプーシキン美術館、街全体が美術館

となった。ロシア音楽史の初回授業ではロシア史の 989 年キリスト教受け入れに始まり、9 世紀のキエフ・ルーシ時代から 1991 年ソ連邦崩壊までの流れを、ロシア史では、格林カ「皇帝に捧げし命」、ボロディーン「イーゴリ公」、ムソルグスキー「ボリース・ゴドゥノフ」、リムスキー＝コルサコフ「皇帝の花嫁」、プロコフィエフ「戦争と平和」、ショスタコーヴィッチ「ムツェンベスク群のマクベス婦人」などの歴史と深く関わるオペラ作品の理解に繋がり、歌曲伴奏法での実践に結びついている。全ての科目が相互に深く関わり合い、これらは総合的な音楽性と実技を幅広く豊かにすることに役立っている。

まとめ

芸術の宝庫ロシア。音楽、建築、美術、演劇、文学の芸術文化が独自に繁栄してきた。19 世紀後半、ルビンシテイン兄弟は音楽院を創設し、ロシア音楽教育・演奏芸術の確立と発展に貢献した。モスクワ音楽院ではニコライ・ルビンシテイン、チャイコフスキーが教鞭をとり、タネーエフ、ラフマニノフ、スクリャービンへと受け継がれ、イグムノフ、ゴリデンヴェイゼル、ニコラーエフ、ネイガウスの名教師によりロシアピアノ楽派を形成し、二十世紀最大のピアニストリヒテルの出現に至るまで列挙すると限りが無い。

20 世紀初頭からロシア革命や世界大戦、社会主義リアリズムの激動の時代へと入り、ショスタコーヴィチ、プロコフィエフ、ミャスコフスキー、ハチャトゥリアンはジダーノフ批判や大粛清の影響を受け、社会の変化に翻弄されながらも芸術を追求した。

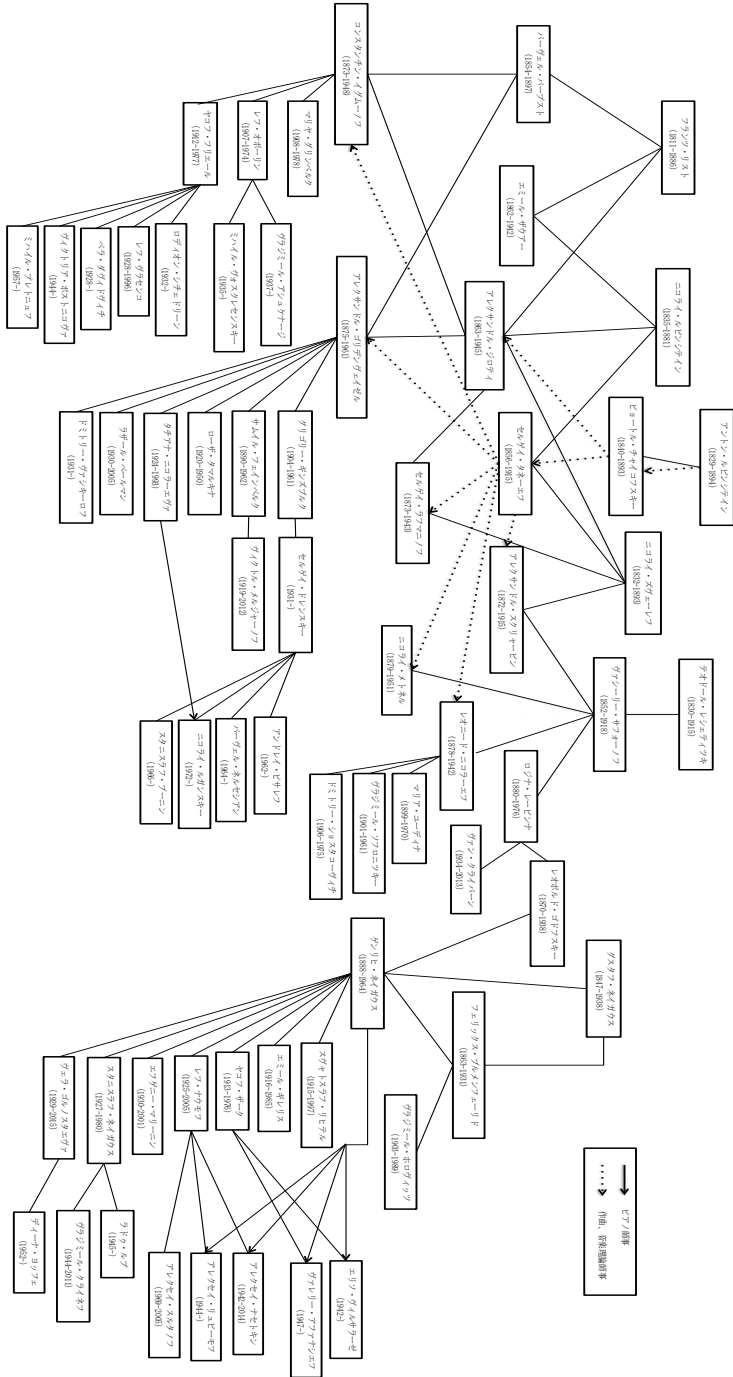
ルビンシテイン兄弟が熱心な教育者であり第一線で活躍する演奏家であった様に、彼らから派生したロシアピアノリズムの精神は、150 年の歴史と共に受け継がれている。モスクワ音楽院はこれまでの偉大な伝統を守り継承しながら、ピアノ演奏芸術は新しい境地へと今も発展を遂げている。

おわりに

ロシア音楽とロシアピアノリズムへの好奇心が、素晴らしい音楽家と出会い、彼らから受けた教えは芸術への希求へと発展している。近年多くのロシア人ピアニストや教育者が来日し、コンサートやマスタークラスが行われ、またロシア語音楽文献の翻訳も少しずつ増えてきている。日本の音楽教育や芸術文化の向上に繋がることを切に願う。

トルストイの言った、「芸術においては<ほんのちょっとしたこと>が大切だ」xivを心に留めて、自身も邁進していきたい。

図1 エクスポート先



参考資料



▶ピサレフ教授のレッスンが行われた 36 番教室 ▶モスクワ音楽院マーリーザール石板



▶モスクワ音楽院のシンボル チャイコフスキー像 ▶モスクワ音楽院大ホール



▶第 143 回モスクワ音楽院卒業式での筆者(2012.5) ▶大学院リサイタル(2015.1)

参考文献

単行本

1. 加藤一郎 『ソヴィエトのピアノ教育とピアニズム』 ムジカノーヴァ、1983年。
2. 佐藤泰一 『ロシアピアニズムの系譜 ルービンシュタインからキーシンまで』 音楽之友社、1992年。
3. 朴久玲 『まあるいものさし くりよんのモスクワ音楽院だより』 ショパン、1997年。
4. 原田英代 『ロシア・ピアニズムの贈り物』 みすず書房、2014年。
5. 一柳富美子 『ムソルグスキー 「展覧会の絵」の真実』 東洋書店、2007年。
6. ヴェーラ・ゴルノスターエヴァ 『コンサートのあとの二時間 : モスクワ音楽院・ペレストロイカ以前の音楽家群像』 岡本祥子訳、ヤマハミュージックメディア、1994年。
7. エレーナ・リヒテル 『ネイガウスのピアノ講義 -そして回想の名教授』 音楽之友社、2007年。
8. ゲンリッヒ・ネイガウス 『ピアノ演奏芸術 -ある教育者の手記-』 森松皓子訳、音楽之友社、2003年。

辞典

1. ロシア音楽事典、日本・ロシア音楽家協会編、河合楽器製作所・出版部、2006年。
2. コンサイス露和事典、井桁貞義編、三省堂、2006年。

雑誌論文・記事

1. 寺西春雄 「ロシアにおける音楽教育事情 -ソビエト期の伝統について-」、『ユーラシア研究』 通号 21、1999年、34～39頁。
2. 寺西春雄 「現代ロシアにおける音楽教育事情 -ソ連崩壊後の音楽教育をめぐって-」、『ユーラシア研究』 24号、2001年、48～53頁。
3. 一柳富美子 「ソヴィエトの音楽教育 -ブーニン、キーシンを生んだ土壌」、『音楽芸術/音楽之友社』 45(9)号、1987年、55～59頁。
4. ヴェーラ・ゴルノスターエヴァ、ナターリヤ・トゥルリー 「ピアニスト・インタビュー ヴェーラ・ゴルノスターエヴァ&ナターリヤ・トゥルリー-モスクワ音楽院のピアノ教育の伝統を受けついで」 『ムジカノーヴァ/音楽之友社』 28(5)号、1997年、98～101頁。

映像

1. ADGO (2015/11/7) : Richter, Kagan & Gutman play Shostakovich Piano Trio no. 2 - video 1984, <https://www.youtube.com/watch?v=xXpT8guRAN0> (2017/12/10)

脚注

- i モスクワ音楽院小ホール
- ii 1875年～1949年の歴代成績優秀者149名より卒業年順に記載。(2017年12月現在)
- iii 佐藤泰一『ロシアピアノイズムの系譜 ルービンシュテインからキーシンまで』音楽之友社、1992年、10頁。
- iv Alexander Ivanovich Villoing (1804-1878) フランス人ピアニスト。フランツ・ゲーベリとジョン・フィールドに師事。1862年からペテルブルク音楽院にて教鞭をとる。
- v Theodor Kullak (1818-1882) ドイツのピアニスト、作曲家、教師。
- vi Siegfried Wilhelm Dehn (1799-1858) ドイツの音楽理論家、音楽学者。
- vii 原田英代 『ロシア・ピアノイズムの贈り物』みすず書房、2014年。
- viii ロシア語における *kafedra* は、講義、講演などのための演壇、大学などの講座を意味する。コンサイス露和事典、井桁貞義編、三省堂、2006年、345頁。
- ix Воспоминания о Л.Н.Толстом: Вблизи Толстого Записи за 15 лет. (1922-23, 1959) / Лев Толстой и музыка. Воспоминания. (1953)
- x 日本語訳著書：ゲンリッヒ・ネイガウス 『ピアノ演奏芸術 -ある教育者の手記-』森松皓子訳、音楽之友社、2003年。
- xi 加藤一郎 『ソヴィエトのピアノ教育とピアノイズム』ムジカノーヴァ、1983年、8頁
- xii Richter, Kagan & Gutman play Shostakovich Piano Trio no. 2 - video 1984,
URL : <https://www.youtube.com/watch?v=xXpT8guRAN0> (2017/12/10)
- xiii モスクワ音楽院ピアノ科学科長(2017年12月現在)
- xiv エレーナ・リヒテル 『ネイガウスのピアノ講義 -そして回想の名教授』音楽之友社、2007年、12頁。